

---

# ピッピカチュウ

夜代衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ピッピカチユウ

### 【Nコード】

N4344H

### 【作者名】

夜代衣

### 【あらすじ】

ポケモントレーナーのアンズはヒカリと出会い、一緒に旅をすることにより！世界をまたに駆けた壮大な冒険ストーリー

## 出会い（前書き）

この小説ではオリキャラ・アンズと、ヒカリがメインの物語です。  
なき方が変なポケモンもいそうですが、勘弁してください。  
クレームは受け付けませんが、誤字・脱字があったら教えてください。  
さい。

## 出会い

シンオウ地方のとある島、そこは島の半分がポケモンの研究所だった。

もう半分は町になっていた。その島の名前はアクロ。その町の名前はアクロタウン。

おっと 紹介が遅れました。アタシの名前はアンズ。パートナーは色違いのピカチュウ。

ピカチュウ！自己紹介は？

『ピッカッチュウー！』

……え？自己紹介はいいから小説の続き？ゴメンナサイではどうぞ。

「なあに？パパ？」

アンズはピカチュウをなでながら聞く。

「前、旅に出たことあったろ？」

「ええ。ジム戦でしょ？リーグ戦ならこないだ勝って優勝したじゃない」

そうなのだ。アンズはリーグ優勝をするほど強いのだ。

「また、何かポケモンを見つけてきてはくれないかな？」  
「ええ、いいわよ。いこ！ピカチュウ！」

『ピッピカチュウ！』

アンズは肩掛けバッグを持ち、オレンジのチェック柄の腰につける前掛けのようなものを、左腰に付けそこにファスナーがついていて、そこにピカチュウが入った。

「いってきまーす」

「いってらしゃい。気をつけてね」

アンズはダッシュで家を出て行った。

くフタバタウンく

「んっあ〜！やっと着いた〜」

静かな時が流れる町フタバタウンだ。

その時だった。

「キヤアアアアアアアアア

！！！！！！！」

どいてどいてえ！

自転車が突っ込んでくる。

「え……？ちよ……！！うそお

！！！！」

アンズは危機一髪のところを避けた。

キキキイイイ！！

その自転車に乗っていた女の子は急いでブレーキをかけた。が、ブレーキが甘く、そのまま海に落ちてしまった。

(え……ええ……これって……アタシのせい？)

「って！考えてる場合じゃなかった！！いけ！トリトドン！！」

『トリト！！』

トリトドンは海に入りその女の子を助けた。

「ねえ！大丈夫！？」

「あ……うん……大丈夫！大丈夫！」

アンズは胸を撫で下ろした。

「ゴメンね。アタシはアンズって言うの。よろしくね！」

「よろしく！私はヒカリっていうの。こちらこそよろしく」

ふたりはアハハと笑った。

「あ！そうだ！あなたにも悪いことしちゃったし家へおいでよ」

「え！？いいの？」

「ええどうぞ。このピカチュウもね」  
『ピッピカチュウ』

くそして五分後く

「ママ！ただいま」

「お帰りなさい。・・・あら？そのこは？」

「アズよ。さっき知り合ったの」

「始めまして。アズです」

「いらっしゃい。丁度たくさんごはん作ったからアズちゃんもたべていったら？」

「じゃあお言葉に甘えて」

そういつてアズは食卓に着いた。

『ピカチュ』

「ふふ！ピカチュウのもあるわよ」

そういつてヒカリのママはポケモンフーズを差し出した。

ピカチュウは嬉しそうに口にいれた。

ヒカリとアズが食べているのは温かいクリームシチューだ。

「おいしー！！」

アズも嬉しそうな顔をした。

〜数分後〜

「そいやあさ、ヒカリは何してたの？」

「私、ナナカマド博士にポケモンを貰いに行くところだったの」

「そうなんだ。ナナカマド博士と会ったの、久しぶりだな」

「え！？アングズ、ナナカマド博士に会ったことあるの？」

「ええ」

「へえ〜そうだったんだ」

「てことはヒカリは新米トレーナーでマサゴタウンに向かっている途中ってことね」

「そーなのよー」

「じゃあいつしよにいこー！」

「えっ!？」

「一人より二人のほうが良いでしょ？」

「そうだね、とヒカリは行って、二人でフタバタウンを出発したのであった。

## 出会い（後書き）

ポケモンだいすきクラブでラティアスという名前を見つけた方。それはアタシです。

## 旅立ち

「マサゴについた」

ヒカリはグリーンと身体を伸ばした。

「ほら！早く行くよ！」

「あゝ待ってよアンズ！置いてかないで〜！！」

ヒカリは急いで後を追った。

〜研究所〜

「ナナカマド博士！………博士？」

アンズはひょいっと研究所内を見渡した。  
誰も居ない………

「アンズ………誰も居ないわよ？」

「おっかしーわねえ？」

その時だった。外でドツツカーンと派手な音がした。

「な……何!？」

「いつてみましょ〜!!」

二人は外に駆けていった。

く外く

『ガアアアアアア!!!!』

「くっ……凶暴なポケモンだ」

ナナカマドは苦戦していた。

「このままでは……!!!!」

『ウガアアアアアア!!!!』

ポケモン……リングマはナナカマドに攻撃しようとしていた。

「ピカチュウ!!かみなりよ!!!!」

『ピーカー!!!!』

リングマにヒット!!リングマはその場から逃げ出した。

「ナナカマド博士!大丈夫ですか?」

アングスがナナカマドをおこす。

「おお、アングくんか。すまない、助かったよ」

「いえ、いいんです」

「おや!?そのこは?」

「初めまして!フタバタウンのヒカリです」

ナナカマドはフームといいながらヒカリを見た。

「えっと……」

「ヒカリはポケモンを貰いに来たんです」

アンズが代弁した。

「ほう。つまり彼女は新米トレーナーでポケモンをか……こちらに来なさい」

ナナカマドはすたすた歩き始めた。ヒカリとアンズは後ろを付いていった。

〈研究所〉

「さて、この三匹の中から一匹選びなさい」

トランクの中に入っていたのは三つのモンスターボールだ。

「アタシはナエトルを貰ったの。今はドダイトスとして一緒にいるわ」

「そーなんだ。……じゃあ私、ポツチャマにします」

「そうか。では、ヒカリくんにポケモン図鑑とモンスターボールをプレゼントしよう」

「わあ！ありがとうございます！」

貰ったのはピンク色のポケモン図鑑とモンスターボールを貰った。

「アタシとおそろいだね！」

アンズも青色のポケモン図鑑を見せた。

「そーだね！」

「ポケモンバトルやゲットの仕方はアンズくんには教わるという。彼女はポケモンリーグの優勝者だからね」

「そ．．．そんなにすごいのか!?」

「そうだ．．．聞いてなかったのか?」

「教えてなかったただけだもん!」

アンズはプーと膨れた。

「ねえ!一緒に旅にいこ!」

「ええ!もちろんよ」

二人は研究所の外へと出て行った。

## シンジコ

ここは201番道路。

「この先がシンジコよ」

マサゴより西へ行ったところにシンジコがある。

「ねえアンズ、どんなポケモンがいるの？」

「水タイプ中心のポケモンで、一説によれば感情の神エムリットが居ると言われているわ」

「へえ〜。エムリット・・・か」

シンジコを目指して歩き続ける。

「ヒカリ、旅に行くのならママさんに了解とっといたら？いちよう」

「あ！そうだね。そうするよ」

二人は一度フタバタウンに戻った。

〜ヒカリの家〜

「ママー！」

「あら？ヒカリ、どうしたの？」

「あのね、私・・・トップコーディネーターになるために、旅に出ることにしたの」

ヒカリのママは黙って少しうつむいた後、パツと顔をあげフツと微笑んでいった。

「そう言うと思った。いてらっしゃい。私もニヤルマーも応援してるわ」

『ニヤーン』

「ありがとう・・・ママ、ニヤルマー」

ヒカリも安心したように微笑んだ。

「はい、これ。あげるわ」

ヒカリのママが差し出したのはリボンケースだった。

「がんばってねー!」

「うん!」

2・3歩後ろからアンズも微笑んでいた。

〈210番道路〉

「こっから西ね」

アンズは西を指差す。

「よし!! エムリットにあってやる!!」

「簡単に合えたらアタシも苦労してないわよ・・・」

「ア・・・ハハハ そうだよね」

くシンジく

「着いた」

「ここにいるんだよ。エムリットは」

「へえく……綺麗だな……」

岸からずーっと遠くを見渡す。

その時だった。急にガヤガヤした連中が来た。

『ピカ？』

ピカチュウが、オレンジの腰掛(?)から顔を覗かせてきた。  
どうやらテレビ局のようだ。

「こちらはテレビ コトブキです。今日は赤いギャラドス出現!?  
をレポートしに来ました。

おや?あそこにトレーナーがいますね?ちょっと突撃取材してみま  
す」

そう言うなりアンズたちのほうへ来た。

「あの……何か?」

アンズがおずおずと聞く。

「あなた方はなぜこのシンジに?」

「エムリットがここにいると聞いたので」

「そうですか……赤いギャラドスのことを何か知りませんか  
?」

「赤い……ギャラドス!?」

アズはどこかで聞いたことがある赤いギャラドスについて考えた。

「あ……あの〜」

ヒカリがレポーターに話しかける。

「なんですか?……もしかして赤いギャラドスのことを何か!?!」

「え〜と……最近それを目撃したって人がいて」

アズを含め、一同が凍りついた。

「あの……!?!」

「その人は!?!その人は今どこにいるの!?!」

肩をつかまれ、グラグラ前後にゆすられる。

「その……人は……つい最近……旅へ……!?!」

それを聞いた瞬間、レポーターがぐんとうなだれた。

「そう……ですか……」

アズがヒョイツとシンジコをみた。

そして、洞穴を見つけた。

「あの……洞穴は?」

「え！？あれ？よく見たら・・・洞窟のような」

アンズとヒカリは顔を見合わせニツツと笑う。

「チョット行ってくるね」

そういつてモンスターボールをベルトからははず はずそうとしたその時だった。

ビュウウウウと強い風が吹き、アンズのバンダナが飛んでいく。

「あっ！」

ピチャンと水面に落ちる。

「いつけない！GO！トリトドン！！」

トリトドンはシンジこにバッチャーと水しぶきをあげた。

トリトドンの背中にピョンと飛び乗った。

「いつてー！トリトドン」

『トーリー！ー！』

すごいスピードでバンダナまで向かう。バンダナが沈む直前に取った。

「あーあ・・・ピチャピチャじゃん・・・」

ギュツツとしぼる。

「まあいいや。それよりトリトドン、あの洞窟に向かって！」

『ドンドン！』

洞穴の近くに降り立つ。

「く苦労様。しばらくヒカリの方へ行つて」

そう命令するとトリトドンがヒカリの方へ向かっていった。

「さっ行こ！ピカチュウ」

『ピカピーカ！』

洞穴に入っていった。

く洞窟内く

「水溜りがいっぱい・・・」

アズがスニーカーで踏みしめた跡がはつきり残るくらい泥っぽいところもある。

その時だった。ポタツとピカチュウの上に水滴が落ちる。

『ビガア　　！！！！』

相当ビックリしたのか走って洞窟の奥へ入ってしまった。

「あ！ピカチュウ！？ピカチュウ　　！！！！」

アズの声はただ洞窟に響くだけだった。



## シンジ(後書き)

次回予告

ピカチュウを追っていったアンズ！洞窟の奥で見た不思議なポケモンとは・・・？ええ！！まさか！！！！

次回！シンジこの出会い！皆！お楽しみに！

番外

ヒカリ「何！？この思わせぶりな次回予告は？」

アンズ「気にしない気にしない。直ぐにわかるって！ね？」

作者「アタシに振るなよ急に！！とにかく、楽しみにね！」

## シンジとの出会い

「ピカチュウ？どこにいるの？ピカチュウ　　！！！」

アプズの声は洞窟内に響き渡る。

「どうしよう・・・見つからないよ・・・」

ピチャーインピチャーインと雫が落ちる音がする。

突然、先のほうが明るくなった。

「？何だろう？」

その光の方へ走っていく。その刹那・眩い光に一瞬目を細めた。

「何・・・」

広いところに出た。きらきら輝く不思議なところのように思えた。

『ピカチュウ！』

「ピカチュウ！！」

ピカチュウがアプズの肩に飛び乗った。

「もう！勝手にどっか行っちゃダメじゃない」

『ピカピーカ・・・』

ピカチュウを叱りながらもその表情は柔らかい。

それにしてもこの場所は何だろう？広い場所に出たと思ったら水溜りがあるだけで、その先は行き止まりだ。

「にしても・・・急にこんなところに出るなんて・・・」  
『ピカ？』

ピカチュウもよく分かっていないようだ。

その時だった

水溜りの中心で、何かが光り輝いた。

浮き上がったかと思えば、アングの周りをクルクルと飛ぶ。  
アングの目の前に来た。

ピカ　　ン

眩い光が洞窟内に広がった。

くシンジこのほとり〜

「な・・・何？あれは!!!？」

ヒカりはトリトドンをなでながら急に洞窟から出てきた光に驚愕する。  
驚愕おどろす

『チャマチャマ!!--!』

ポツチャマも羽をばたばたさせる。

「そうだね、行ってみよう！」

ヒカリとポツチャマはトリトドンの背中に飛び乗り、しっかりと掴まった。

ヒカリたちが湖の中央に来たときだった。

ザッパ　　ンと急に水しぶきが上がった。

でてきたのは赤いギャラドスだった。

「おーっと！！ついに出てきました！赤いギャラドスです！！！」

レポーターは興奮気味で赤いギャラドスをレポートする。

「キヤアアアアアアアア！！！」

『ポツツチャマアアアアアア！！！！！！』

ヒカリとポツチャマは波に飲み込まれた。

「プハッ！」

なんとか直ぐにあがってこれたが、赤いギャラドスはヒカリを洞窟に近づけまいと行く手を阻む。

「どうすれば……いいの！？」

（洞窟内部）

光が収まり、アンズが目を開けた。そこにいたのは

「エムリット……?」

エムリットだった。

『ピカピツカ?』

ピカチュウも驚きに目を丸くする。  
アンズはかばんからポケモン図鑑を取り出す。

「エムリット 感情ポケモン 悲しみの苦しさと喜びの尊さを人々に教えた。感情の神と呼ばれている」

「やっぱりここにいたのね。探したのよ?エムリット」

『そう……ですか……』

「驚いたわ……パパがアタシをここに向かわせた理由も分かっている。アクロタウンで毎年行われている儀式にエムリット・ユクシー・アグノムが来てなかったからね」

『仕方が無かったのです。この世界のバランスを取らなくてはならなかったのです』

「バランス……?どういうこと?」

エムリットはスウーと奥に行き壁を指差す。

『ここを見ていてください』

エムリットに言われたどおり壁を見る。するとだんだんいろいろな映像が出てきた。

『この世界は各地の伝説・幻のポケモンによって支えられています』  
「ええそうね。」

カントーは ファイヤー・サンダー・フリーザー・ミュウ・ミュウツ―

ジョウトは エンティ・ライコウ・スイクン・ホウオウ・ルギア  
ホウエンは レジロック・レジアイス・レジスチル・ラティアス・  
ラティオス・カイオーガ・グラードン・レックウザ・ジラーチ・デ  
オキシス・マナフィ

シンオウは エムリット・ユクシー・アグノム・ディアルガ・パル  
キア・ヒードラン・レジギガス・ギラティナ・クレセリア・ダーク  
ライ・シエイミ

それがどうしたの？」

『ポケモンたちのバランスが崩れ始め、世界のバランスが取れなくなっていたんです』

「ポケモンたちのバランス・・・？」

『ポケモンにだってバランスがあります。しかし・・・最近はずらの破壊やポケモンハンターの急増で我々でうまく調整ができないのです』

アズはうつむいた。そして耳をすますとまるでポケモンたちの悲鳴が聞こえてくるようだった。

『これをとめるには、不思議な宝石が必要なのです。この世界のあちこちに封印してあります。それをアクロの祭壇に全てを集めて持つていくのです。そして儀式を行ってください』

「わかったわ・・・って世界のあちこち!？」

『はい……ここだけではなくアルミアとフィオレにも行ってください』

アンズは愕然とした。

『とりあえず、この地方の宝石を集めてください』

「……こうなりややるきやないわね」

『ありがとうございます。さあ……赤いギャラドスを止めに行きましょ』

一人と二匹は外へ向かった。

〈湖中央〉

「トリトドン！岸へ逃げて！！」

『トリーー！！』

ヒカリたちが岸に着いたちようどその時だった。

『ギャラドス！お止めなさい！！』

エムリットがギャラドスをとめた。

『いいことです。さっ湖にお戻りなさい』

エムリットがそういつとギャラドスは湖の中に姿を消した。

「あ……あれはエムリットです！！なんと言う幸運！！」

レポーターは力いっぱい言う。

『あなた方にもお願いです。それは放送しないで下さい。騒がしいのはゴメンですから』

「でも・・・これには私の運命がかかっているんだから！」

『そうですか・・・やさしく言っている間に放送しないといってもらいたかったのですが仕方ありませんね』

そういうなりエムリットは念力でカメラを浮かせ地面に叩きつけ破壊した。

「エムリット！」

アンズがでてきた。

『分かっていますよ・・・』

エムリットは水に溶けるように消えていった。

## シンジの出会い（後書き）

〈次回予告〉

次回！とうとう本格的に旅に出る！！目指すはコトブキシティ！！

番外

ヒカリ「シンジこで何があったの？」

アズ「後で教えてあげるわ」

ヒカリ「気になるな」

作者「はいはい。では皆さん、またね」

ピカチュウ『ピッピカチュウ』

## ゲット

「ふーんそんなことがあったんだ」

『チャマチャマ』

ヒカリとポツチャマも納得してくれたようだ。

「とにかく、世界のバランスを崩してはならないわ！だから……だからアタシはやる。」

全ての地方から……全ての宝石を見つけ出して見せるわ」

アングの目に迷いの色は無い。

「それなら私もやるわ！」

「えっ！でも……」

「だーいじょーぶ！！なんとかなるわ」

「……ありがとう、ヒカリ」

二人の顔には微笑みがうかんだ。

「そうと決まれば早速出発ね！！」

アングはかばんを肩にかけた。

ピカチュウは腰掛に入る。

二人はコトブキシティを目指して歩き始めた。

\*\*\*\*\*

「ねえアンズ、ポケモンってどうやって捕まえるの？」

「そうか、ヒカリは新米トレーナーだもんね。じゃあちょっと見て」

そう言うなりアンズは直ぐ近くの草むらに入った。

「草むらとか木の上とか水中とかいろいろなところにポケモンはいるわ」

その時だった。草むらからコリンクが飛び出してきた。

『コリ！コリ！』

「ふふ、出てきたわね。行け！ロコン」

モンスターボールから元気よくロコンが飛び出した。

『ココンコン！』

「やる気満々ねロコン。行くわよ！ かえんほつしゃ　！！」

ロコンの かえんほつしゃ はコリンクにヒットした。

『コリ！』

コリンクの でんきショック　！！

「ロコン!!かわして!!」

ロコンはひらりとかわした。

「ロコン! ほのおのうず!」

『コーオン!!』

コリンクは渦の中に閉じ込められ身動きが取れなくなった。

「行け! モンスターボール!!」

コリンクにモンスターボールが当たる。しばらく左右にボールが揺れた。

赤い光が消えた。

「コリンクゲットよ」

『ピツカッチュ!!』

アンズはボールを持ち上げた。

「すごかった・・・ああやってポケモンを捕まえるのね」

「ええそうよ」

そう言ったときだった。モンスターボールが消えたのだ。

「ええ!?!なんで?どうして?」

ヒカリは何が何だかサッパリ分からないといった様子だった。

「ポケモンは6匹までしか持てないのよ。6匹以上は自動的に研究

所に送られるわ。研究所以外にもポケモンを預っててくれる人はいるわ」

「そうだったんだ。ああ驚いた」

ヒカリはたはは・・・と笑いながら頭をかいていた。

「さあ、この道を進めばコトブキよ」

また二人は歩みを進めた。

## ゲット（後書き）

〜次回予告〜

到着！コトブキシティ！ポケッチカンパニーやテレビ局など大きな建物がいっぱいこの町で起きた事件とは？そしてあのふたりはだれ??

次回！

コトブキシティでハプニング!?

番外

<sup>ヒカリ</sup>H「ハプニング？ハプニングってなによ」

<sup>アンス</sup>A

「さあ？どんなトレーナかしら？」

Y（夜代衣 作者）「テレビではおなじみのあの二人よ。まあ楽しみにしててね」

H・A「早く次がきになる〜」

コトブキシチィでハプニング!?

「うわぁ〜これがコトブキシチィ!」

ヒカリは目をキラキラさせていた。

「ここではコンテストをやってるのよ」

「ええ!? 本当に!」

「え．．．ええ。ポケモンコンテストINコトブキをやってるわ」

ヒカリのテンションが急上昇した。

「それにはポケッチカンパニーがあるからポケッチがもらえるわ」

「あ〜ん!!早くほしい〜!!」

「ま・まずは落ち着いて．．．ポケモンセンターに行きましょう。

アタシお腹すいちゃった」

アズの一言でヒカリは落ち着き二人はポケモンセンターに向かった。

\*\*\*\*\*

「ポケモンセンター」

「ポケモンセンターか．．．」

ヒカリは辺りを見渡してる。

「ヒカリ！まずはポケモンをあずけましょ。ポツチャマも疲れちゃつてるわよ」

「あ・・・うん」

アンズとヒカリはモンスターボールをジョーイさんに預けた。  
ピカチュウは前掛けから出てきて、モンスターボールを置く台の上にチヨコンと座った。

「では、ポケモン達をお預かりします」

「よろしくお願いします」

（10分経過）

「お待たせしました。皆元気になったわ」

「ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

『ラッキー』

ジョーイさんとラッキーに見送られて二人は食堂に向かった。

〈食堂〉

「ねえアンズ、コンテストはいつあるの?」

「え〜と・・・明後日あさってね」

「明後日あさってってすぐなのね」

「ま・出たいんなら今日から練習すればいいわよ」

「うん!そうする」

「ポケモンもう一匹ゲットしといたほうがいいわよ」

「なんで?」

「コンテストは二つのステージがあるから、二匹連続だとまげちゃ  
うよ?」

「そっか・・・」

ヒカリはソバを食べながら視線はやや上を向いている。

(ついでにアンズはラーメンを食べてます)

「ヒカリさん」

話しかけてきたのはジョーイさんだ。

「これ、あなたのママからよ」

「なんだろ?」

ヒカリは小包を開けてみる。

「あ!これって・・・ドレス?」

ヒカリは箱の外に出してみる。

「あれ？ヒカリ！その箱に手紙が入ってるわよ」  
「ホントだ！え〜と・・・」

ヒカリへ

出発前に渡そうと思ってたけどあなたがさっさと行っちゃったから小包で送らせてもらいました。

そのドレスは私がコンテストで来ていたものよ。あなたもコンテストに出るんだったらそれ着ていきなさい。

コンテストでは自分もオシャレして出るものなのよ。  
がんばなさい！！

ママより

P・S

アンズちゃんに迷惑掛けないでね

「だつてさ」

「コンテスト・・・よし！やる気でできたなあ」

ヒカリとアンズは食器を返しに立ち上がった。

「じゃあポケモンをゲットしに行こっか」

「ええもちろん!!・・・あれ?ピカチュウは?」  
「ここに・・・あれ?」

いつもの所にピカチュウはいない。

「ピカチュウ?ピカチュウ?」

食堂内を見渡したが姿が見えない。

「困ったな」

フーッと短いため息をついた。そして食器を返してからまた見渡す。

「いないわね」

ヒカリも探す。

「ねえ君、どうかしたの?」

一人の少年が話しかけてきた。

「あなたは?」

「俺はサトシ!でこっちは相棒のピカチュウ」

『ピッカチュウ!!』

「俺はタケシだ」

サトシ&ピカチュウとタケシ・・・皆さんもう分かっていると  
思うので説明省きます。

「はじめまして。アタシはアンズ」

「私、ヒカリ！よろしくね」  
「ところでどうしたんだ？」

サトシが聞いてきた。

「それが・・・ピカチュウがいつのまにか居なくなってるのよ」  
アズが詳しい状況を話した。

「なるほど・・・。でいなくなったと」

タケシがあごに手を当てる。

「じゃあ一緒に探そうぜ！」

「えっ！？いいの？」

「ああ、もちろんじゃないか」

ありがとう・と言ってポケモンセンターを後にした。

コトブキシチイでハプニング!? (後書き)

次回予告

ピカチュウを探しに行った4人!!!だがそこにいたのは……

次回!

ピカチュウ搜索隊

番外

Y「(やよいとは作者です)うん……  
くなつたような短いような」

異様に長

A「まあまあ!気にしない気にしない!」

は……

H「にしてもまさか手伝ってくれると  
よかったね!アンス」

A「ええ!!」

Y「私をわすれないで」( ; )

## ピカチュウ捜索隊(前書き)

いや〜・・・今回はちょっと次回予告とは違うんだよね〜・・・

第7話始まるよ〜

## ピカチュウ捜索隊

〈ポケモンセンター前〉

「どっから探そうか？」

『ピカ？』

サトシとピカチュウが辺りをキョロキョロ見る。

「ピカチュウは・・・甘いものが好きなの。だから甘いおいの所に居るかも・・・？」

アンズが人差し指をあごに当てて言う。

「甘いにおいか・・・」

「この辺には甘いにおいがするところは無さそうね」

タケシとヒカリはにおいをかいでみるが、甘いにおいはしなかった。

「ミツハニーとか居たらいいんだけどね」

アンズはタハハ・・・と笑う。

「ミツハニー・・・？」

サトシはポケモン図鑑を取り出す。

「ミツハニー はちのごポケモン 3匹が一つとなったポケモン。ビークインのためにせつせと甘いミツをはこぶ。」

「へえ〜。ミツハニーか……」  
「ソノオタウンのほうに生息してるから……ゲットしに行けないしな〜」

そのときタケシが、

「ちょ〜と！話してないでさっさと探そう！」  
「「は……はい」」「」

という訳で4人はピカチュウを探し始めた。

〜街 聞き込み〜

「街の人に聞いてみよっか」

ヒカリが直ぐ傍の男の人に聞いてみた。

「あの、この辺でオレンジ色のピカチュウ見ませんでしたか？」

「オレンジ色の……？ああ！見たよ」

「どこですか？」

「このへんでさっきまでウロウロしてたよ。誰かがモモンのみをあげたらどこかにいつちやって……」

「そうですか。ありがとございました」

そう言って男の人に頭を下げるとヒカリは3人の元に戻っていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヒカリが3人に説明した。

「やっぱり甘いもの目当てか・・・」

何やってんだか・・・とつぶやくアンス。

「あんだけ離れちゃダメって言ったのに・・・」

「ま・・・まあまあ。とりあえずさっきまでここにいたんならさ、直ぐ近くに居るって!」

サトシが励ます。

「それもそうね。でも・・・ピカチュウいつの間になくなったんだろ? ポケモンだけだったらジョーイさんやラッキーが引き止めてもいいのに」

「とりあえずさがそうぜ。たのむぞムツクル!」

『ムツクー!』

「ムツクル! たのむぞ!」

『ムクムク!』

ムツクルはどこかに飛んでいった。

「よし! アタシも!! 行け! エアームド!!」

『エアームド!!』

「お願いね。・・・あつこの子も連れてって」

アンズが出したモンスターボールから出てきたのはロコンだった。

『コーン！』

元気よくロコンが返事するとエアームドの背中に乗ってどこかに行ってしまった。

「念のため街外れのほうにも行ってみよう」

タケシの案で4人は街の外れへ言った。

（ピカチュウサイド）

『ありゃ？アンズどこ？』

ピカチュウがしゃべってる？それはピカチュウの言葉を略すのが面倒だからだ！！

『どつしよづ・・・僕・・・迷子になっちゃった』

ピカチュウがモモンの実をかじりながらトボトボ歩く。

『アンズ〜？どこ〜？アンズ〜』

ある3人組がそのピカチュウの後をつけていた。

『ピカチュウ〜？ピカ〜？ピカチュウ〜』

「ねえニヤース何て言ってるの？」

「アンズってトレーナーを探してるようだニヤ」

「今はトレーナーと別れてる・・・絶好のチャンスだぜ」

3人はピカチュウの前に出てくる。

「ねえピカチュウちゃん、どうしたの〜？」

『ピカ〜・・・ピカピカチュウ？』

「ニヤース！何ていつてるの？」

「はあ〜・・・誰だオバサンっていつてるニヤ」

「だ・れ・が・オバサンですって〜!!!？」

「く・・・苦しいニヤ〜！それに言ってるのはニヤーじゃニヤいニヤー!!！」

やっと苦しみから逃れたニヤース。

「おいおいムサシ！あいつ呆れてどっか行ってるぞー!!！」

「何ですって!?!コジロウ！行くわよ！」

『こいつら・・・ホントにうるさい・・・』

アンズのピカチュウは です。若干かわいいキャラ台無しです。

「行っけえ！ハブネーク！」

「サボネア！頼むぞ！」

『ハブネー！！』

『サボー！！』

サボネアはコジロウに抱きつく。

「痛い痛い痛い！！俺じゃなくてあのピカチュウに攻撃だ！」

サボネアはピカチュウに向き合った。

ここからはポケモンたちの会話が始まります。

P 『ホントにめんどくさい！僕は御主人を探してるのに！！』

S 『めんどくさいのはこっちさ！でもやんなきゃなんないからね行くぞー！！』

H 『手加減は無しだからな！』

P 『望むところだ！どっからでもかかってこい！！』

「ニャーもやるニャ」

ニャース乱入

『ピカッ！？』

「後悔しても遅いニャ」

\*バトルスタート\*

「ハブネーク！」どくばり”よー！！”

「サボネア！」ミサイルばり”だ!!”  
「ニヤーは”みだれひつかき”ニヤー!!”

3匹同時攻撃。

『ピカーチュー!!!!!』

ピカチュウの”10万ボルト”！ニヤースは痺れて倒れてしまった。

「ニヤニヤニヤ・・・痺れたニヤ・・・」

ニヤースはなんとかしたが、サボネアとハブネークはまだ戦えると  
いった様子だ。

『ピカア〜!!』

ピカチュウがほっぺに電気をためる。

その時だった。上空からポケモンの影が見えた。

『ピカツ!?!』

『エアー!!!!』

『コーン!!!!』

エアームドとロコンがバトルに参戦した。

P 『エアームド!ロコン!』

E 『お待たせ!あいつら倒せばいいんだな?』

R 『サボネアは私がやるわ!ピカチュウ達はハブネークをお願い!  
!』

P 『了解!でもエアームドはロコンをお願い!ハブネークは僕がし

とめるよ!」

E「じゃあ……行くぜ!」

三匹のバトルが始まった。

## ピカチュウ捜索隊（後書き）

～次回予告～

ピカチュウたちのバトルに参戦したエアームドとロコン！バトルの  
決着は！？

次回！ピカチュウVSロケット団

～番外～

A「どうなってんの？今回？なんかポケモン達だけ横にPとかRと  
かついてんじゃない！！」

Y「ポケモンだけの特典です」

H「私達にも本編で付けてよ」

Y「ポケモンの特典」

A・H「次回もヨロシクね！！」

Y「だからアタシの出番取るなあ～！！」

## ピカチュウVSロケット団(前書き)

だいぶ時間がいちゃったけどなんとか書きました。  
はい、ではドドドゾ〜

## ピカチュウVS Rocket団

「ロコン・エアームドVSサボネア」

「さすがに二対一じゃ勝ち目がないな・・・よし！いけ！マネネ！」

コジロウの投げたボールからマネネが出てきた。

「マネネ！！！」

ピエロのようなポケモンマネネだ。

「サボネア！ミサイルばり！マネネはものまねでミサイルばりをものまね！！！」

「サボネー！！！」

「マネネー！！！」

二匹のミサイルばりがロコンとエアームドに向かってくる。

「ロコン！！！」

「エアー！！！」

ロコンはかえんほうしゃを、エアームドは、はがねのつばさで応戦する。

かえんほうしゃはミサイルばりを焼き、サボネアにあたった。

「サボ                   ！！！」

サボネアは目を回してしまった。

「ああ！サボネア！！クソツ！戻れサボネア！！！！！」  
モンスターボールに吸い込まれたまさにその時だった。

『エアー！！！！』

エアームドのはがねのつばさがマネネにヒットする。

『マナー！！！！』

3メートルほど飛ばされ、マネネも目を回してしまう。

『マ・・・ネ・・・ネエ〜・・・（ガクツ）』

コジロウは唖然とした。サボネアもマネネも一撃だったのだ。

またまたポケモンの会話が始まります。

ロコン R 『手ごたえなかったね、エアームド』  
エアームド E 『そうだな・・・』

愕然<sup>がくぜん</sup>としているコジロウを横目に会話する2匹。

ロコン R （ピカチュウ・・・頑張つて・・・）

〜ピカチュウVSハブネーク〜

「ハブネーク！どくばりよ！！」  
『ハブネー！！！』

どくばりがピカチュウの目の前に迫ってくる。

『ピカッチュー！！！』

ピカチュウはアイアンテールでどくばりをたたき落とす。

「目には目を！歯には葉を！アイアンテールにはアイアンテールよ！！」

ハブネークの尻尾が銀色に輝く。

『ピカア！！！』

ピカチュウはでんこうせっかでかわす。

「ポイズンテール！」

ハブネークのポイズンテールはピカチュウにヒットした。

だが、ピカチュウの特性、せいでんきでハブネークは体が痺れてしまった。

『ピーカーチュー！！！』

10万ボルトがハブネークに当たり、ハブネークはグッタリしてしまった。

ポケモンの会話がまたまたまた始まります

ピカチュウ  
P 『さつさと終わらせればよかった・・・』  
ロコン  
R 『お疲れ様』  
エアームド  
E 『さ。帰ろうぜ』

2匹はエアームドの背中に飛び乗り大空へはばたいた。

「次こそは色違いのピカチュウを捕まえてやるんだからあ！！！！」

ムサシの怒号だけが響き渡った。

コジロウとニャースは深くため息をついた。

## ピカチュウVS Rocket団（後書き）

次回予告

次回、またピカチュウにあえたアンズたち。次に待ち構える試練とは！？

次回！

「今日も野宿！？悪魔の料理」

見てね

番外

A「今回出番がなかったな」

Y「しゃーないじゃん」

H「てゆーか短い・・・」

Y「う・・・」

## 今日も野宿！？悪魔の料理（前書き）

SSにハマリ過ぎなのと修学旅行の準備で遅れてしまいました・・・

明日です。

わっくわくするー！！

## 今日も野宿！？悪魔の料理

ピカチュウがバトルしているところアンズ達はポケモンセンターに戻っていた。

「みつかんないわねえ……………」

アンズは肩を落とす。ピカチュウは冒険心が強く、こうして時々勝手にどこかに行くのだ。

「だが、興味深いことがわかったぞ」

タケシの言葉に3人は思わず身を乗り出す。

「ピカチュウが居なくなつた時間、この時間にポケモンセンター周辺で甘い香りがしていたらしい。もしかしたらピカチュウはその香りに誘われたんじゃないか・って事なんだが……………」

「そしたら今度はその甘い香りがどこから来たのか……………になるよな?？」

「でも私達がポケモンセンターから出たときはそんな匂いはしなかったわ」

うーん…………と4人同時に考える。

その時だった。

ウイ  
ン

自動ドアの方を見るとエアームドとロコン、そしてピカチュウが入

ってきた。

『ピッカー!!!』

「ピカチュウ!!!」

アンズは駆け寄り、ピカチュウを抱き上げる。

「ロコン! エアームド! ご苦労様」

『コーン!!!』

『エアー!!!』

アンズの元へサトシとタケシ、ヒカリが近づく。

「よかったね! アンズ!」

「うん!」

「見つかって良かったぜ!」

『ピカチュウ!!!』

サトシとピカチュウも喜ぶ。

「ありがとう! 皆!」

精一杯の感謝の気持ちをこめて言った。

「何かお礼はできないかな? アタシにできることなら何でも言って

!」

「じゃあさ・・・」

サトシがモンスターボールをバツと突き出して言う。

「俺とバトルしてくれ!!」

「……ゴメン、ちよつとそれはムリかなあ……」

「えっ!?何で?」

「今この子達ちよつと疲れてるみたいだから休ませてあげたいの」

「うん……それじゃあまた今度会ったときにバトルしようぜ!

」!

「ええ!その時は望むところよ!!」

2人はしっかりと手を握った。

↳ 数時間後↳

サトシと分かれた2人は重要なことを思い出した。

「あ……!!アングのピカチュウ探すことで頭がいっぱいでコ  
ンテストのこと忘れてた!!」

ヒカリがソノオへ向かう道の途中でヒカリが声を上げた。

「今からコトブキに戻っても受付はとっくに終わっちゃってるわ・・・」

「がっくり〜」

「ねえヒカリ！コレあげるから元気出して」

アンズはカバンからポケッチを出した。

「あっ！ポケッチ！！」

「アタシ、ピンクあんま好きじゃないんだ。だからあげる」

ヒカリはポケッチを腕につけた。

「ありがとう！」

顔を合わせて笑った。

〜夜〜

「今日は野宿ね・・・」

「え〜！！？」

アズは慣れたように開けた場所に荷物を下ろしテントを張る。

「ねえヒカリ、アタシ薪とか水汲んでくるから、料理作っててくれない？」

「ええ！？でも火とかどうするの？」

「ロコンがなんとかしてくれるから。ここにも木の枝が落ちてるからそれで何とかしてて。直ぐ戻るから」

「あ！ちよつと！アズ」

アズはピカチュウと共に森の奥に駆けて行った。

「がんばってみようか……」

『ロコン？』

ヒカリは石を積んでかまどを作り、そこに鍋を載せた。小枝を持ってきて、ロコンのおにびで火をつけた。

「さつ、シチューでも作るっかな。きつとダイジョウブ！」

『ポチャ』

心配そうなポツチャマをよそに、ヒカリはシチューの具を切り始めた。

〈20分後〉

「ゴメンゴメン。遅くなっちゃった。なかなか水が見つかんなくて」

アンズが水筒を。ピカチュウが枝を持つてきた。

「ほら！できたよ！食べてみて！」

「あっありがとう。ほら！皆も出ておいで！」

アンズはボールを投げて残りのポケモンを出した。

『エアー！』

『バーン！』

『ドダー！』

『トリトー！！』

「ほら皆、召し上げれ」

アンズがポケモン達にヒカリの作ったシチューを器に入れて渡す。

「はい！ポツチャマ」

ヒカリもポツチャマに渡す。

「それじゃ！いったただつきまーす！」

『ピッカピッカピー！！』

アンズがシチューを一口、口に運んだ。

ポケモン達も同様に口へ運ぶ。

カチャーン……

アンズの手からスプーンが滑り落ち、器に当たってカチャーン……と音を立てた。

決してうまいからではない。むしろその逆だ。

「ヒ・・・ヒカ・・・リ・・・何・・・入れたの・・・  
・・・??」

「え〜つと・・・最初はうまくいったんだよ！でも・・・味付けでコショウが入りすぎたから砂糖を入れたの・・・そしたら甘くなっちゃったからいろいろ入れたらこうなっちゃって・・・」

『ビガ・・・ヂュー・・・（ガクツ）』

『ポツ・・・チャマ〜・・・（ガクツ）』

余りのマズさにピカチュウとポツチャマがダウンした。

アonzのほかのポケモン達もダウンしてしまった。

エアームドは羽を広げたまま地にひれ伏すような格好になってしまった。

他の子も同様に、

バンギラスは口を押さえて縮こまる。

ドナイトスは首を左右に振りイヤイヤをする。

トリトドンはすでに目を回してしまっている。

効

果はバツグン？

ロコンは口をつけようとしなかった。作っているシーンを見てしまったロコンは食べる気がしないのだろう。

「もう絶対ヒカりに料理はさせないから

！！！！！！」

アonzの声は森いっぱいに広がった。

**今日も野宿！？悪魔の料理（後書き）**

今回は次回を考えていなかったため省かせていただきます。  
申し訳ございません！！！！

A「ホントに大丈夫？」

次はちゃんとやるから

H「心配……………」

新たな仲間。ヒリヒリ天使！？（前書き）

遅くなってすみません。

空いた時間に書いていたので遅くなりました。

サブタイトルネタバレですね・・u

## 新たな仲間。ヒリヒリ天使!?

前日、ヒカリの悪魔の料理を食べてしまったアンズ達（ロコンを抜いて）は結局一睡もできず仕舞いだった。

ヒカリの料理は、後味もひどくなかなか眠りにつけないまま朝になつてしまった。

「はあ~~~~」

アンズは特大のため息をつく。真っ白なショルダーバツクをチラッと見ると、ピカチュウが中からお菓子を取り出していた。

『ピカチュウ!』

ピカチュウは食べせろといわんばかりの勢いでアンズに近寄る。

「いいよ、それ、食べよ……」

ピカチュウの取り出したチョコをいくつかに折り、自身のポケモンたちとポツチャマに渡す。

5口ほどで終わってしまったチョコを物悲しく思ってしまった。

（そっぴゃあヒカリどうしたんだろ……?）

チラッとテントを見た。そのときだった。

「きゃあああああ……!」

ヒカリの悲鳴が響く。

「ひ……ヒカリ!!?」

投げ捨てていたブーツを無視し、はだしでテントへ走る。

「ヒカリ!? どうしたの!?!」

「入らないでえ」

中から悲しい声が聞こえた。

「ヒカリ?」

『ポチャ?』

ポツチャマが中に入る。

テントの中ではヒカリの髪が乱れに乱れていた。

「最悪」

鏡を見ながら嘆くヒカリ。

そこに入ってきたポツチャマは『ポチャ?』とないた。

「そうだ! ポツチャマ! バブルこうせん!!」

『ポツチャマー!!!!』

テントかもこもこといろいろな場所が盛り上がり、収まってゆく。  
アンズには何が起きているのか分からなかった。  
と、そのとき、テントからヒカリが出てきた。

「じゃーん！自然キューティクル！！」

キラキラと輝く髪が美しい。

「もう！心配したじゃない！！」

「ゴメンゴメン！」

「まあいいや。この先、ソノオに行く前にとっても小さな村があるわね」

「何て街？」

「ロックタウンだって」

「ロックタウン??？」

聞いたことの無い街の名前に、ヒカリは首をかしげる。

「小さな街だけどコンテストがあるみたいね」

「ホントに!？」

キラキラと目を輝かせる。

「ここからあつちまで早くても3日はかかるから、その間に練習ね？」

アンスの問いかけにヒカリは大きくうなずいた。

（練習）

「まずはコンテストについてね」

アンズがヒカリの前に立って説明する。

「コンテストとはポケモンの長所を引き出し、可憐に見せる事。ポケモンバトルとは違い、見せるバトルね」

「実際、どうゆうことをするの？」

「最初は個人で技を見せるの。個人の力量が分かるわ。次に予選を勝ち抜いた8人でバトルをしその勝者が大会の優勝者よ」

「へえ」

ヒカリは心底感心したようだ。

「さっそくやってみたい!!!」

「じゃ・・・じゃあやりましょうか」

アンズはヒカリの勢いに負けて練習に今すぐやることにした。

「ポツチャマ！頼むわよ！」

『ポツツチャマー!!!』

元気いっぱいポツチャマが出てきた。

（お手並み拝見といきますか・・・）

「でもどうしたらいいのか分からないや」

ガクッ!!

「だ・・・だってアタシよく考えたら初めてだから・・・」  
「じゃあちよっと見せて」

アンズはモンスターボールを持つ。

「GO！ロコン！」

『ロコン！』

6つの尾をフリフリ振る。

「おにび！で、それを操って！！」

『ロコン！！！！！』

おにびを操りおにびで円を作る。

「かえんほうしゃ！」

『コオーオン！！！！』

かえんほうしゃは縄のように滑らかに弧を描いた。ロープのようなかえんほうしゃはおにびをくるくる回す。

次第に一箇所に集まっていく2種類の炎は爆発した。

小さな火の粉がロコンの周りを着飾る華のようだ。

「す……すごい……」

ヒカリは啞然とした。

「ロコン！フィニッシュいくよ！だいもんじ！」

ロコンのだいもんじは迫力があつた。

「もう1回おにび!!」

色の違う炎がだいもんじを着飾り、先ほど落ちた火の華がだいもんじに吸い込まれてゆき、どんどん大きくなっていく。

「ロコン!飛び込め!!」

『コーン!!』

アズズの指示にロコンはだいもんじの真ん中に吸い込まれるように飛び込む。

するとおにびがまた外に弾き飛ばされ、花火のように爆発する。

だいもんじも通り抜けた後、5つの火に別れ爆発。

爆発はさらに小さな火の華に爆発を呼び、たくさんの花火が光り輝いた。

「とまあこんなかんじね。今は美しくてもあるけどちょっとかっこよくしてみたの。どうだった?」

「すごかった……」

ヒカリは心底驚いた表情だった。

「でもこの子はコンテストじゃなくてポケモンコンテストより、バトルに向いてるからコンテストには向いてないっということね」

「へえ」

それでも美しいものを作り出せるアズズとロコンが羨ましかった。

「……そろそろいこっか?日が暮れちゃうよ」

「あっうん」

ヒカリはちょっと複雑な思いでアンズと共にロックタウンへと足を進めた。

## 2日目

場所は打って変わって山道。

1日で相当歩いたのかロックタウンへはもう直ぐだった。

「ポッチャマのコンディションもバツチリ!!コンテストいけそうだね」

『ポッチャマ!!』

ヒカリはつきつきしていた。初めてのコンテスト。わくわくしないほづがどうかと思う。

「もうすぐしたら着くよ」

「あと1日じゃないの?」

「ちよつとね」

アンズは言葉を濁す。

「ロックタウンって崖に家やコンテスト会場が並んでるんだけど・・・それがけっこう広くてね。今は使っていない場所もあるから結構大変なのよ。それも含めて3日」

そうなんだ、とヒカリが言ったすぐだった。  
ガサガサッと近くの草むらが揺れる。

『パッチ！！』

二人の前に現れたのはパチリスだ。

「かわいい〜！！」

ヒカリはすでにメロメロ（？）だ。

「私がゲットしてもいいよね？」

「ええ。どうぞ」

パチリスの前にヒカリが立つ。

「ポッチャマ！お願い！」

『ポッチャマ！！』

ヒカリの初バトルが始まった。

「ポッチャマ！バブルこうせん！！」

『ポッチャマ〜！！』

ポッチャマの放ったバブルこうせんはパチリスに当たった。だがあまり効いていないらしく、パチリスはまだまだ平気だ。

『チツパー！！』

パチリスはほうでんであたりに電気を流す。

『ポツチャマ〜』

ポツチャマは電気に絶えたが、効果はバツグン。あまり長くは持ち  
そうも無い。

「なんで〜」

ヒカリの髪も大変なことになっている。

「ポツチャマ！たいあたりよ！」

ポツチャマのたいあたりはパチリスの急所に当たった。

「よ〜し！いつけえ！モンスターボール！！！」

モンスターボールがコンツとパチリスにあたり、赤い光となってボ  
ールに吸い込まれていく。

1回・・・2回・・・3回とボールが左右に揺れる。  
そして、真ん中の赤い光が消えた。

「パチリスゲットでだーいじょーぶー！」

「やったじゃん」

アンズが近づいてきた。

「ポツチャマもお疲れ様」

『ポツチャマ！！』

胸を張るポツチャマ。そのまま後ろに倒れた。

「キヤア！！ポツチャマ」

倒れたポツチャマを抱き起こす。

「疲れちゃったんだね。お疲れ」

その頃だった。そんな2人に近づく怪しい影があった。

新たな仲間。ヒリヒリ天使！？（後書き）

次回

またまた登場R団！

お楽しみに〜

番外

H「更新遅い！！」

はい……

A「いつまでたってもジョウトにいけないじゃん！！このペースじゃ」

はい……

H「アズ！！ネタバレ！！」

A「しまった！！」

はい。とにかく次回お楽しみに〜

**またまた登場R団！？（前書き）**

ちよくちよく書いてこんな感じですよ。  
ではどうぞ！！

P・S

道具のアイデアまだまだ募集中！こんな道具が欲しい！！と言っ  
てをばんばん応募してください。1人何個でもかまいません^^

またまた登場R団!?

「ねえコジロー。見たでしょ?」

「ああ見た見た。シンオウポケモンだな・・・」

「フフン。あのポケモンは私にこそ相応ふさわしいのよ!!必ずゲットしてやるわあ!」

「い・・・いつになくムサシが燃えてるニャー・・・」

(はい!皆さまおなじみロケット団です。)

そのころ、ロケット団に気づかないままの二人はガケをよじ登るような形になる道を進んでいた。

断崖絶壁のその街は、ほぼ90度の崖に階段がある。手も足も使わないと進めないその崖は旅に慣れているアンスには平気だが、ヒカリにはきつい。

『ピカ!ピカチュウ?』

『チパチパ?』

ピカチュウとパチリスがヒカリを気に掛ける。

「えっええ。だいじょーぶ!」

口ではそうは言っているが、相当辛そうだ。

「疲れたら言ってね!そしたら少し休やすも!」

少し上からアンスが言う。

「うん！」

ヒカリは少しずつ足を進める。と、その時だった。

ガゴン！！

鈍い。

岩の崩れる音。

「キャツ……………」

声を上げる前に足場は崩れてゆく。

（もう……………だめだ！！）

ヒカリがあきらめられた瞬間だった。何かヒカリの下にもぐりこむ。下を見ると太陽の光でキラリと反射するその体ホディーに一瞬目を背ける。

『エア―！！』

ヒカリの下にもぐりこんだのは、エアームドだ。

「あ……………危なかった……………」

冷や汗を流しながらアンズが静かに呟く。

その手にはモンスターボールが握られていた。

エアームドは上へとヒカリを導く。エアームドの僅わずかな羽ばたきでさえ辺りの岩が欠けていく。

「エアームド！気をつけて！！！」

アンスの声にエアームドは軽くうなずく。エアームドはアンスの直ぐ近くに降り立った。その背からヒカリが降りる。

「こ……恐かったあ〜」

「無事でよかった!」

アンスがニッコリ笑って言う。

「ありがとね」

ヒカリのありがとにアンスはくすぐったそうに笑う。

「ホラ!もつてっぺんだよ」

2人は足場に気をつけながらゆっくりのぼっていった。

〜ロケット団〜

「ついにできたわよ〜」

「あたらしいロボットだニヤ〜」

「これで色違いのピカチュウとパチリスをげつとだぜ〜^^」

「さあ!作戦開始よ!〜!」

『オオー!〜!』

ヒカリ&アズ

やっと頂上に着いた二人はその場に座り込んでいた。

「も・・・もうムリ～～」

「アタシも・・・ムリ・・・」

2人はハア、ハアと息を荒げていた。

「で・・・でもココまで来ればもうポケモンセンターは直ぐそこよ！がんばりましょ」

「う・・・うん！」

立ち上がった二人の近くに何かが近寄る。

「はいどうもお～！！疲れた人をポケモンセンターへ運ぶロケット運送屋です！！」

濃いピンクの髪の毛の女性が手をヒラヒラさせている。後ろには人力車がある。

「今なら無料で乗せますよ！～<sup>タダ</sup>どうですかあ？」

「どーですかニヤー！！」

青い髪の人と子供が1人。

「わあ！ちょうど良かった！ね・ね！アズ！のろうよ！！」

「そうね。疲れてたし、いいかもね！」

『ピカ！！』

『チツパ!!』

ピカチュウがピョンっと跳ねて人力車に乗る。  
続いてアンズとヒカリが乗り込む。

(かかったわね)

ガシャンガシャン!!

アンズとヒカリの体が鉄の物で人力車に止められる。

「なっなにこれ!?!」

「う・動けない!!」

2人が身をもがいている間に、ピカチュウとパチリスが捕まる。

『ピカ!ピ〜カア〜!!』

『チピア!!チ〜パ〜!!』

「ムダムダア!これは電気を吸収するのよ!」

「あなた達はいったい何者!?!」

「なんだかんだと聞かれたら!」

「光の速さでやってきた!」

「風よ!」

「大地よ!」

「大空よ!」

「宇宙に届けよデンジャラス!」

「宇宙に届けよクライシス!」

「天使か悪魔かその名を呼べば!」

「誰もが震える魅惑の響き!」

「ムサシ!!」

「コジロウ!!」

「ニヤースでニヤース!!」

「時代の主役はあたし達!!」

「我ら無敵のロケット団!!」

「ソクナンス!!」

だが、ロケット団の登場でも2人は……

「どうやっても外れない!!」

「ちよつと!そんなもんどうでもいいからピカチュウとパチリス返しなさいよ!!」

完全にロケット団登場シーンを無視である。

「やくなこつた!!」

「返せと言って返すほど甘くはないんだよ!!」

「そういうことだニヤー!ポチットニヤー!!」

とって手元のボタンを押したニヤースがロボットを呼ぶ。  
チエリムの形をしたなんとも言えないロボだ。

ロケット団はそのロボに乗り込む。

「さあ!逃げるわよ!!」

ムサシがそう言っている間にもピカチュウとパチリスが必死の抵抗を見せるがやはり全て吸収される。

「無駄よむむだ!!」

ムサシがピカチュウ達に言う。

「さうて！借金に借金して作ったロボットの威力をみよ！！」

P「借金なんか知るか！」

ロケット団には『ピカピ！ピカチュー！！』と聞こえている。（ニヤース以外）

コジロウが何やら赤いボタンを押すと、ロボットの足から筒状の物が出てきて、そこから火を噴く。  
もの凄いスピードで遙か彼方へ行く。

「ま……待ちなさい！！！！」

アズズの叫び声は、虚しく宙を彷徨さまよっていた。

またまた登場R団！？（後書き）

（次回）

ドゥシーン！！じしんでラッキー？

お楽しみに！！

（番外）

A「ピッピカチュウ アナザーで只今募集中のこんな道具があったらしいナ」

H「どしどし応募してね！」

P「詳しくはアナザーでどうぞ！！！」

A・H「ピカチュウ。なんて言ってるか分かんないわ」

P「ビガー……ン」

追加です！

なんと！ピッピカチュウが4000アクセスを超えていました！

皆様、ホント感謝です^^

ありがとうございます（^^）/Thank you!

ドゥシーン！地震でラッキィ？（前書き）

ハイテンポで書いていきました^^  
ではどひびぞー！

ドッシーン！地震でラツキー？

ガチャガチャ・・・ガチャガチャ・・・

何とかして金具を外そうとするが、全くもって外れない。

「どうやったら・・・外れるのよ!？」

ヒカリはせめて腕だけは抜こうと思うが抜けなかった。  
すると、ドサツと何かが落ちた。

ヒカリのバツクだ。

「あら・・・？」

アンズは何かに目をやる。

それはモンスターボールだ。

「あれは・・・ポツチャマの？」

「え・・・？ああ、うん、そう」

数秒後、「いい事思いついた!」と言って、笑った。

「へ?」

ヒカリが聞こうとするが、その前に人力車が倒れた。

ドッサーン!!

もうもうと上がる土煙。

よく見ると、人力車の一部が壊れ、バランスが崩れたらしい。

「ア……アンズ！急いで！！！」

「わ……分かってる！！！」

そう言うや否や、固定されている手を少し下に持っていき、二つのモンスターボール」に触れる。

「出てきて！ロコン！バンギラス！」

ボタンを押すと、2匹のポケモンが現れた。

『ロコン！』

『バーン！』

「え？ちよつとアンズ！？どうするの？？」

「まあ、見ててよ！」

スツと2匹を見据える。

「バンギラス！まずこのガケっぶちから中央へ運んで」

頷いたバンギラスはもの凄い力で真ん中のほうへ人力車を運ぶ。

「ロコン！バックとってこれる？」

『ロコン』

タタタツと走っていくとヒカリのバックを啜えてもってくる。

「そのモンスターボールを開いて！」

だが、ロコンは、『コーン?』と分かんないといった表情で首をかしげる。

「そのボタンを押すのよ!」

ヒカリの言ったことがわかり、前足でボタンを押す(と言っよりも踏む)。

するとポツチャマが出てきた。

『ツチャマ!!』

「いい?よく聞いて!」

皆、アングの声に耳を傾ける。

「まずこの人力車を破壊して!」

すると3匹は深く頷いた。

「いくよ!ヒカリ!」

「うん!」

「バンギラス!かみくだく!」

派手な音と共に人力車は崩れる。

しかし、未だに金具いまは付いたままだ。

「ねえ、バンギラス?これ、取れる?」

そう尋ねると、グツと金具を握り

壊した。

「よし!コレも取れたことだし、ロケット団を見つげなくちゃ!

「！」

ヒカリが意気込む。

「もちろんよ！あのこたちは絶対返してもらうんだから！……！」

アングが言ったとき、ヒカリはあることに気づいた。

「ねえ？なんでポツチャマを出したの??」

「直ぐ分かるわよ」

ごつごつした岩道を走って行った。

くロケット団く

「やったく……やったわく！ピカチュウとパリチスゲットよお！」

「！」

「パリチスじゃなくてパチリス！何で間違えるかなあ……」

喜んでいるムサシの隣で、コジロウは呆れかえっていた。

『これでボスへのプレゼントもOKだニャー！後はゆっくりこの基地にいるんだニャー』

ニヤースはニヤハハハハ、と笑っていた。

そのころ、2人はロケット団の基地を発見し、中に入ろうと試みていたのだが……

「ねえ？どうやって入るの？」

「だからポツチャマとロコンの出番なの」

2匹を見る。

「かえんほうしゃとバブルこうせんを当てるのよ」

「あつなるほど〜。よし！いくよ！ポツチャマ！」

『チャマチャマ』

「かえんほうしゃ！！！」

「バブルこうせん！！！」

冷えたり暖めたりのお繰り返しで、鉄が弱っていく。

「いまよ！バングラス！ばくれつパンチ！！！」

鉄の壁はもろく崩壊し、大きな穴が開いた。

「いきましょ！」

「もちろん！」

2人はロケット団のいる場所へ向かった。  
階段を上がって上がって上がって……そして……

「見つけたわよ！ロケット団！」

大きなパーティー会場のような部屋にロケット団はいた。

「ゲゲ！ジャリガール！」

『これはヤバイニャー』

『ピカチユーー！』

『チッパー！』

ピカチユーとパチリスはピョンピョン跳ねる。

「チャンスよバンギラス！2匹を助けて！」

『バーン！』

ばくれつパンチでオリを粉々に吹っ飛ばす。

「え〜い！こうなたら……」

「ポケモンバトルよ！！」

『新しく手に入れたポケモンの威力を知るがいいニャー！！』

「ええ！？」

アンズとヒカリが驚いてると、二人の出したポケモンは……

「行け！マスキッパ！」

「頼んだわよ！ハブネーク！」

マスクッパはかなり奇抜なデザインである。

「戻ってバンギラス！ロコン！」

2匹をボールへと戻す。

「お願いね……」

ボソつとつぶやき別のボールを手に取る。

「行け！ドダイトス！！」

アングが高くボールを投げる。

『ドダー！！』

大きい体は、それ相応の体重によって、床が抜け落ちそうになる。

「ドダイトス！？」

ヒカリは、ポケモン図鑑を取り出す。

説明を聞いた後、

「ナエトルの最終進化系なんだ……」

といい、自身のポツチャマを見る。

『ッチャマ！！』

誇らしげに胸を張る。

「よおし！頼むわよポッチャマ！」  
『ポチャポチャ』

戦いの火蓋は切って落とされた。

「マスキッパ！タネマシンガン！！」  
「ハブネーク！ポイズンテール！！」

二匹の攻撃はすばやい。

「ポッチャマ！かわして！！」  
「ドダイトス！受け止めて！！」

ポッチャマはポイズンテールをかわした。だが、ドダイトスはタネマシンガンを受け止めた。あまりダメージはなさそうだ。

「な・・・なんて頑丈なドダイトス・・・！！」  
「ハブネーク！どくバリよ！！」  
「ポッチャマ！バブルこうせん！！」

二つの技が相殺されていく。

「ドダイトス！じしん！！」  
『ドッダー！！！！』

前足を上げ、思いつきり大地を踏む。

すると、その衝撃で床が抜け落ちた。

『きゃあああああ！！！！』



『ポチャポ〜チャ』

『チツパー!』

『ドダー!!!!』

皆大喜び。

この後、無事ポケモンセンターについて、コンテストの特訓をした。  
が………?

ドッシーン！地震でラッキー？（後書き）

〈次回〉

コンテストの特訓！その前にレツツクツキング！  
お楽しみに！

〈番外〉

A「なんかペースあがったね」

Y「頑張ったからね！」

H「なんで昼間にやらないの？」

Y「パソコンが占拠されてるから（笑）」

A「それから！この場を借りてお礼を言いたい方がいます」

H「だれ？だれ？」

A「それは・・・コーラルさんです！」

H「どうして？」

Y「感想いっぱい送ってくれるからです^^」

A「と言う訳で、どうもありがとうございました！」

## 番外

すこし息抜きして、ババーンとクリスマスバージョン!!

作者の夜代衣です。

A「皆さま。この小説をご覧になって頂き、ありがとうございます。今回は、クリスマス、特別バージョンです。ゆっくりお楽しみ下さい!!」

アナザーを使わず、こちらを利用しました。こっこのほうが皆様みてくださるので(^^;)では、どうぞ!!

あたし、アンズ。今日はサトシたちを呼んでクリスマスパーティー!!!

アニメではお馴染みのキャラクターたちもいるのよ!!

んで、今はヒカリとタケシ、サトシといっしょに準備中!!

「あたしはタケシと料理を作ってるわ」

「じゃあ、私はいろいろ準備するね。サトシも手伝って!」

「OK! さつさと終わらせようぜ!」

『ピッピカチュウ!!』

〈アンズ・タケシ〉

「じゃあ、まずは料理かデザートか。アンズはどっちがいい？」

「デザートにするわ。そっちのほうが得意なもの」

「じゃあ、たのむぞ」

「まかせて!」

2人は料理とデザートを作り始めた。

タケシは、てきぱきと、料理を作っていく。

隣では、アンズがデザート。つまり、スイーツを作っている。

ケーキにクッキー。チョコレート。

ピカチュウがちよくちよく手伝いながら、どんどん作ってゆく。「

そして数時間

「こっちは順調に終わりそうね」

「たくさん必要だけだな」

『ピカチュウ!...!...!...!』

ピカチュウは、滑って、焼いたクッキーを持ったトレイごとひっくり

り返す。

『ピカ！ピカ！ピカ！ピカチュウ！』

パツと起き上がったピカチュウが、トレイをキャッチして、次々とクッキーを載せていく。

「ピカチュウ、気をつけてね？」

『ぴかっちゅー』

ちよっぴり照れているピカチュウであった。

くヒカリ・サトシ

テーブルにはテーブルクロス。食器、ナイフとフォーク。

2人はたんたんと置いていく。

「ふー……にしても、量が多いなあ……」

「だーいじょーぶ！ポツチャマ達が手伝ってくれるわ」

『ツチャマ！』

「だな。ピカチュウ」

『ピッカ！』

ピカチュウたちは、掃除もしている。

サトシはピカチュウと掃除を一緒にやり、

ヒカリは華を飾る。

それが終わってから、いろんな飾りを部屋中につけた。

「あとは料理だけね」

ヒカリは一息ついてそういった。

そのころ、料理も完成していった。

「さあ、運びましょう」

そう言って、巨大な台に次々とのせる。バンギラスはそれを押し  
ゆく。

「おーい！料理ができたぞー！！」

タケシが声を掛けると、2人は待ってました！と言わんばかりに駆

け寄り、料理を机に持っていく。

「あと10分・・・ギリギリいけるよね？ピカチュウ？」  
『ちやあ〜？』

前掛けからピョコツと顔を覗かせて、首をかしげた。

OPEN

「サトシ！久しぶりね！」

「久しぶりカモ〜」

「やあ、サトシ！久しぶり」

「サトシ！タケシ！わあ〜久しぶりだね〜」

「サトシ、元気にした？」

「サートシくん、君は相変わらずだね」

「やあ、サトシ。久しぶりじゃな」

「サトシ！私達も来ちゃったってことね！」

「タケシさん！お久しぶりです」

「おねえちゃん！私も来ちゃった」

上から、カスミ

ハルカ

ケンジ

マサト

サトシママ

シゲル

オーキド博士

コトネ

カズナリ

モナカ（オリジナルキャラクター。アングスの妹）

そのほかにも、ジムリーダーに四天王、フロンティアブレン、コ  
ーディネーター、ポケモントレーナー、ポケモンレンジャーなど、  
たくさんの方が来ていた。

「よし！じゃあ皆いくよ！！」

『せうの！！』

『メリー！クリスマス！！』

番外（後書き）

なんか駆け足で書きちゃったので、なにかとグダグダです。『オイ』  
モナカという新キャラは、今後小説に出しますが、いつになるんで  
しょうかね？

（聞くな！！）

え〜とまあとりあえず、

メリークリスマス！！



か？」

「はい、まだしてますよ。貴女を登録するのですか？」

「いえ、こっちの娘です」

アズがヒカリをずい、と押す。

「え〜と、それじゃあ本人証明するものを貸してください」

「え!?!え〜と……」

アズがヒカリにボソツと言った

(ポケモン図鑑)

それを聞いたヒカリは慌ててカバンから出した。

「では、少々お待ち下さい」

いつも通りのエンジェルスマイル。

(ねえ?どれくらいで登録終わるの?)

(1分いららないかな?)

と、言ってる間に……

「はい、終わりましたよ。

フタバタウンのヒカリさんでよろしいですね？」

「はい!ありがとうございます!」

ポケモン図鑑を受け取り、アズと一緒にまたソファに座った。

「ねえ、コンテストはポツチャマとパチリスででるんだよね？」

「うん。てゆうか！それ以外無いじゃない！」

「あっ、ゴメン」

「それにしても……………」

ヒカリは考える仕草おかしをした。

「ポケモン達って、ご飯はポケモンフーズだけど、おやつもあるの？」

「あるよ」

素朴な疑問を、簡潔に返した。

「作ってみる？」

「うん！やるやる〜!!」

2人はジョーイさんに給仕室を借りて、ポフィンを作ることにした。

「木の実はたくさんあるから」

アンズは色とりどりの木の実を出した。

「じゃあ、どうやって作るの？」

「まずは、コレ入れて……………」

スーブの素……………とゆうか、ポフィンの素？なんでもいいや（笑）

「そこに好きな木の実を入れて」

ヒカリが選んだのはモモンの実だ。

「あ！入れる前に切ったほうがいいわ。それと、モモンは多めに入れて」

アズがなぜそう言ったのかは切って分かった。

モモンは中が空洞なので、たくさん入れなくては、量が合わないのだ。

「で、焦げないように、ゆっくり混ぜて」

ヒカリは焦げない程度に混ぜた。

「少し、硬くなってきたわ」

「んじゃ、もう少し早く」

だんだん、重みを増してくるポフィン。

「はい！早く！」

だんだんできてきたポフィン。

それを絞りにいれ、トレイに搾り出してゆく。

「焼こう！」

オーブンにいれ、あとはタイマーを合わせて放置。

数分後

チーン！

焼けた音。その頃にはピカチュウたちも戻って来ていた。

『ポチャポ〜チャ』

『チパ〜!!』

「食べたいの？はい、どうぞ」

お皿に入れたポフィンポフィンは山盛り。

『ピ〜カ〜』

「ちゃんとピカチュウピカチュウのもあるよ」

3匹は、それぞれ一個ずつ、口に入れた。

『チャマ!!』

『チツパチツパ〜!!』

『ピツカ〜!!』

3匹ともご満悦のようだ。

「よかった」

ヒカリが、とても嬉しそうに笑った。

(ヒカリには料理はさせない……………でも、ポフィンは

任せよう………)

アンズは一緒に笑いつつ、そう思っていた。

コンテストの特訓！その前にクッキング！（後書き）

もう直ぐしたら終わるよー2009 .

皆さま、毎回毎回、読んでくださってありがとうございます。

あけまして、おめでとうございますー！

## ロックタウン 地下の町

コンテストまで残り二日。

午前中はポフィンをつくってて、  
午後から練習。

「ポツチャマ！バブルこうせん！」  
『チャマー！』

まず小手始めにバブルこうせんを出してみる。コレが意外と操るのが難しく、ヒカリは苦戦していた。

「ポツチャマ、もう一回！」  
『ツツチャマー！！！！！！！』

バブルこうせんで放たれた泡は、くるくると弧を描き始めた。それが光に当たってとてもキレイだった。

「ポツチャマ！つつく！」  
『チャマ！チャマ！チャマ！チャマー！』

パン！パン！

キラキラと光が降ってくるようだった。

「うまいうまい！」

アンズは笑いながらパチパチ手を叩く。

「ありがとう！」  
『ポチャポ〜チャ』

ヒカリとポッチャマはうれしそうだ。

「じゃあ、コレ上げるね」

アングが渡したのは一つの小さな青いケース。

「？何これ？」

「開けてみて」

青いケースの止め具を外し、開けてみる。

中に入っていたのは、青っぽいモンスターボールのような透明なボールと色とりどりのシールだ。

「これ、何？」

「それはボールカプセルとシール。そのカプセルの中にボールを入れて、そのボタンのところにシールを貼るの。」

「へえー……」

ヒカリはボールカプセルを手にとって見ている。

「それをコンテストに使うといいわよ。出演が華やかになるから」  
『ピカチユ〜』

華やかさを示したいのか、高くジャンプしながら腕を広げる。  
結局、着地に失敗し、ハデに尻餅をついてしまった。

『ピカア〜』

それを見た全員が大笑いする。

「今日はこんなトコでいいじゃない？後は明日やりましょう」

『ポチャポチャ！！』

ポツチャマが断固反対する。

まだやりたいのだ。

「ロツクタウン、観光しないの〜？」

アンズが少し意地悪く言うとししふてくされていて、結局ついていった。

外は快晴。

木がほとんど無いロツクタウンは、高い位置にあるといついで、日差しが辛いところだ。

時折吹く風がとても気持ちよかった。

いや、

正確にはしょっちゅう吹いている。時折は間違いだ。アングの髪も、バンドナも風に吹かれてはためいている。ヒカリもニット帽が飛んでいかぬよう押さえつける。

だが風が一旦やむと、今度は中々吹かなくなる。

「なんなのこの町はー！」

ヒカリは愚痴をこぼす。

「曇っているときが一番いいんだけどね」

水筒の水を少しだけ飲む。

「それにここは水がとてもおいしいの。ちょうどこの地下に地下水があつて、その水はテンガン山から流れてきた雪解け水なんだって。まあシンオウ地方の水はだいたいそうなんだけどね」

「だからおいしいんだあゝ」

水筒の水をポツチャマに差し出す。

ポツチャマはがぶ飲みだ。

「ポツチャマ、飲みすぎたら噴水まで持たないよ」

アングがポツチャマの頭をなでながら言う。

「噴水があるの？」

「この町の中央にね」

5分ほど歩くと噴水があった。直径20メートルの大きな噴水だ。

「それにしても・・・この町、ほとんど何も無いんだけど・・・」

ヒカリは不思議そうに聞いた。

「今から地下の町に行くの」

噴水の水が止まった。

「入りやすくなったわね」

「えっ？」

噴水の真ん中は巨大な支柱になっており、その上から水が吹き出ていたようだ。

膝下まで水が溜まっていた。

ヒカリはミニスカだが、アンズはジーパンなのですそをまくる。

ジャブジャブと渡って支柱に着くと同時に支柱の扉が開いた。中は滑り台になっており、簡単に下までいけた。

「なにがあるのかしら・・・」

明るくなった先にあったものは・・・？

続く



ロックタウン 地下の町（後書き）

～次回～

コンテストをかけた大バトル！？

お楽しみに～

～番外～

A「うわ！短か！！！」

しゃーないじゃん！！頑張って書いたのに消えちゃったんだもん！！

A「また書けばいいでしょ！？」

話数かせいでんだよ（殴）

H「え～と・・・次回お楽しみに！！」

コンテストをかけた大バトル！？（前書き）

はあい……夜代衣です。

眠い……デス。

でもがんばりました。

見てください

コンテストをかけた大バトル!?

地下に広がる広い場所。

よく見ると、いくつかの岩には穴があり、窓のようだ。

「おや?お客さんかい?珍しいね」

1人の主婦(?)らしき人に話しかけられた。

「皆、ココに気づかずこの町を通り過ぎてしまうからね」

「へえ」

ヒカリが相槌を返していた。

「ヒカリ、ここがコンテストが行われる場所よ。ほら、あれがステージ」

指差した先にあったのは、ステーションと呼ぶには質素な高台。でも、しっかりと客席がある。

「なんだい?コンテストに出るのかい?」

おばちゃん(さっきの主婦)が聞いてきた。

「はい!初めてなので緊張するんだけど……アハハハ……」

と、ヒカリが言っていると、後ろで笑い声が聞こえた。



け無駄さ」

その言葉に2人は顔を見合わせて、ニッと笑った。  
そしてアンズが、

「ふーん……負けるのが怖いんだあ。

あ、だから逃げるんだね

「このチキンヤロー」

さらにヒカリが、

「初心者に負けたら恥だもんね」

2人の挑発が、男をやる気にさせた。

「いいよ……受けてたってやる……」

「ルールはそちらが決めていいわよ?」

ソウの隣に居る女の人と言う。  
モデルオーラムンムの女性だ。

「2 vs 2のWバトル。1人1匹づつポケモンを出し、2匹とも倒れたほうの負け。でいいでしょ?」

「OK。いいわよね?ソウ」

「ああ、もちろんだよ。カウ」

女性の名前はカウのようだ……（関係ねえだろ!!）（殴）

「じゃあ、条件交換と行きましようか?」

カウはクルつと振り向く。

「あたしたちが勝ったら威張らないこと。ヒカリをコンテストに出すこと・よ」

アンズが言う。

「僕達が勝ったら町から出て行くこと。それだけさ」  
「わかったわ」

そして3人はそれぞれモンスターボールに手を伸ばす。  
アンズはピカチュウを肩に乗せる。

「GO!ピカチュウ!」

『ピッカ!』

「ポッチャマ!オネガイ!」

『ポツチャマー！！！』

アンズはピカチュウ、ヒカリはポツチャマと、ベストパートナーを繰り出した。

「華麗に頼むよ・・・ギャロップ！！」

『ヒヒーン！！！！』

「美しくね！ミロカロス！！」

『ミロー！！』

ソウはギャロップ。カウはミロカロスを出した。

「先手はそちらでいいよ」

ソウが言うので、「行くよ！」とアンズが言った。

「ピカチュウ！ミロカロスに10まんボルト！！」

「ポツチャマ！ギャロップにバブルこうせん！！」

2匹の技が、ギャロップとミロカロスに迫る。

「かわせ！」「かわしなさい！」

スル、スルリとかわされる。

「今度はコッチから行くよ。ギャロップ！ピカチュウにかえんぐるま！」

「ミロカロス！アクアリング！」

ミロカルスの周りに青いリングが現れる。

その間にもギャロップはピカチュウに突っ込んでくる。

「ピカチュウ！でんこうせっかでかわして！」

『ピカッ！』

ピカチュウのでんこうせっかにはギャロップの前をジグザグに動き、  
相手を翻弄ほんろうさせた上で、後ろに回りこむ。

「そのままミロカロスのほうへ！」

ピカチュウを追おうと振り向いた瞬間だった。

「ポツチャマ！うずしお！」

『ポー・・・チャマアアア！！！！』

うずしおにギャロップが巻き込まれる。

だが、ギャロップは、まだなんとか立っている。

そして、ピカチュウはミロカロスの懐へもぐりこむ。

「ギャロップ！にほんばれだ！！！」

「ミロカロス！どくどくよ！」

にほんばれで、少々薄暗かった地下に光がさす。  
さらに、どくどくを受けてしまったピカチュウ。

『ピツカア・・・』

「ピカチュウ！！！」

「ポツチャマ！ピカチュウを援護して！！！」

『チャマー！！』

ポツチャマがピカチュウの元へ行くこととした瞬間だった。

「ギャロップ！ソーラービーム！！」

にほんばれの効果で、光はためる時間も無く発射される。

『ポツチャ〜……………』

ポツチャマは一撃で倒れてしまう。

「ああ！ポツチャマ！！」

ヒカリは倒れたポツチャマをボールに戻す。

「お疲れ様」

ボールを優しくなでた。

「さあ、どうするのかな？」

ソウが言った。

「ピカチュウは毒状態。ギブアップはお早めにね」

「誰がするものですか！！」

『ピカ！！！！』

なんと、ピカチュウの毒がキレイサッパリなくなっているのだ。

「ど・どうして！？」

「いったい何が……………ああ！！！！」

ピカチュウはモグモグ何か食べている。

「このこは甘いものが大好きなの。だからモモンの実を良く持っている。モモンの効果は分かるわよね？」

やられた……

ソウとカウはそう思った。

「でも、2対1・ここからどうするのかしら？」

「ポケモン勝負はあきらめたら負けよ」

『チユー！！！』

ピカチュウはやる気モード全快だ。

「アンズ……」

「うん。分かってる。ポツチャマの仇、絶対討つから！！」

ヒカリはポツチャマを抱きかかえ（いつ出した）勝負の成り行きを見ている。

（それにしてもソーラービームか……厄介な技覚えているわね……）

数秒俯いた後、アンズは顔を上げた。

「ピカチュウ！ミロカロスにでんこうせっか！！」

一瞬でミロカロスの懐へ入る。

「何度やっても同じよ!!ミロカロス!さいみんじゅつ!!」  
『ミ・・・ミロ!?!?』

ミロカロスはさいみんじゅつを使う前に、ピカチュウの電気技によつてやられてしまった。

「い・・・いつの間に!?!」

「簡単!ピカチュウが懐に入ったとき、そのまま超々至近距離での10まんボルトをしたってわけ」

そしてアンズは、

「ヒカリ、サンキュー」

と言ってウインクした。

実はこの作戦、ヒカリが考えたのである。

先ほど、俯いていたとき、ヒカリの作戦を聞いていたのである。

「ピカチュウ!あとはギャロップだけよ!」

『チュー!!--!』

「ピカチュウを倒すぞ!」

『ヒーン!!--!』

2匹はにらみ合う。

「先手必勝!ピカチュウ!でんこうせっか+かみなり!--!」

ピカチュウはギャロップの背中に乗る。そして、そのままの状態で、かみなりを放った。

『チユウー!!!!!!』

『ヒヒヒヒン!!!!!!』

さきほどのうずしおのダメージもあって、そうとう効いているようだ。

「ギャロップ!フレアドライブ!!」

猛スピードで突っ込んでくる。

「ピカチュウ!アイアンテール!!」

真つ向勝負をした。

2匹がぶつかり合う。

『ヒ・・・ヒ・・・ン』

『ピ・・・カ・・・ア・・・』

「ソウ!油断大敵よ!ピカチュウ!10まんボルト!」

「何!?!」

『チユウ　　!!!!!!』

尻尾をアースに、ギャロップに電気を流す。

『ヒ・・・ン』

ギャロップはその場に倒れた。

「この試合、あたし達の勝ちね!」  
『ピッピカチユウ!』

コンテストをかけた大バトル！？（後書き）

～次回～

コンテストまであと1日！？

お楽しみに～

～番外～

A「バトル、なんかあつけなさすぎじゃ・・・」

H「そうだよ！私たちだってがんばったのに直ぐ終わったじゃん！  
！」

このバトルの本題はアンズVSソウにしたかったんだあ～

H「じゃ無くて～」

もう・・・この小説は、ヒカリのコンテストが中心になっちゃうから（たぶん）バトルくらいやらせなさい！！

H「でも・・・でも～」

口論が続く・・・

コンテストまであと1日？（前書き）

遅くなってすみません！！

別の小説書いてました！！

では、ごうごうッ！！！！

コンテストまであと1日？

「それにしても……」

バトルが終わって一息ついていたときにヒカリがボソツと呟いた。

「コンテストまで後1日半しか無いじゃな　　い！！！！！！」

あまりの気迫にアズは座っていた岩から転げ落ちた。

「わ……分かってるってばあ〜！」

『ピカッチュ〜』

2人（1人と一匹）は手を前に出してSTOPと訴えかけていた。

「練習しよ！ね？」

アズの一言に「やりましょ！」と元気が出てきたヒカリだった。

「んじゃあ、さっきは審査用だったから今度はコンテストバトル  
ね」

「うん！」

「ハア・・・早速始めましょうか。GO！ロコン！」  
『ロコン！！』

ロコンは可憐に着地した。

「パチリス！おねがい！」

『チッパー！！』

パチリスはピヨンピヨン飛び跳ねる。

「じゃ、ヒカリからどうぞ！」

「分かったわ！パチリス！ほうでん！」

パチリスは青い雷を辺り一帯に放出した。

「ロコン！ほのおのうず！」

『ロコン！！』

ロコンの放ったほのおのうずは雷を掻き消した。

「コンテストでは技が失敗すればポイントが減っちゃうわよ！」

「分かってるって！パチリス！もう1回！」

『チッパー！！』

今度は1点に集中させて一直線にロコンへと向かっていく。

『ロコン！！』

ロコンは真正面に受けてしまった。

「やるわね！でもわたしのロコンはそう簡単に倒れないわよー！」

ロコンはブルリと身震いして体に纏わりつく電気を散らす。

「ロコン！おにび！」

蒼い炎を体の近くでクルクル回転させている。

「パチリス！てんしのキツス！」

『チィ〜パ』

だが、ロコンのおにびによって相殺されてしまった。

「今よロコン！あやしいひかり」

ロコンは不思議な光の弾をパチリスに当てる。

「ああ！パチリス！」

「うるたえてる暇は無いよ！ロコン！おにび！」

『ロコン！』

ロコンが一気に走ってパチリスに近づき至近距離でおにびを放った。

『チ・・・・・・パァ〜・・・』

パチリスは混乱と火傷を負い、上手く動けない。

「パチリス！大丈夫！？」

『チッパ〜・・・』

ヒカリはパチリスの表情から後一撃が限界と見た。

「パチリス………全力でおねがい!!」

『チペア………!!』

ロコンが身構える。

「パチリス! ひっさつまえば!!」

『チパー!!』

パチリスは混乱しているにもかかわらず、真っ直ぐにロコンへと突っ込んだ。

「ロコン!! かえん………」

アングの指示が来る前にひっさつまえばはヒットした。

『コーン!!!!!!』

ロコンは何とか体勢を立て直したものの、急所に当たったのか、足がガクガクしていた。

『チツパ………』

パチリスはその場に倒れてしまう。

「パチリス!!」

ヒカリが走って近寄る。

アンズもロコンを抱き上げ、パチリスの方へ走って行った。

「食べて」

アンズはパチリスの口に、木の実を持ってくる。

パチリスはそれを食べた。

『チパ・・・？チツパー！！！！』

パチリスはガバツと起き上がるとヒカリに飛びついた。

「パチリスが倒れたのはきつと状態異常のせいね」

「そっか・・・頑張ったね、パチリス」

『チツパー』

「それにしてもひっさつまえばかあ・・・」

「どうしたの？」

ヒカリがアンズを見た。

「あれ、力をためてからやってみたら？ポツチャマのつつくも」

「え？」

「だから、力をためればどんな効果を発するかは分からないよ。たぶんね」

アンズはロコンをボールに戻す。

ピカチュウがアンズの肩に飛び乗ってきた。

「"じゅうでん"したら"ほうでん"みたいだね」

「溜めて放つ・・・か」

パチリスもボールに戻した。

( やって損はないわね・・・あと1日、頑張ってみよっと )

〜夜〜

ポケモン達もスッキリ元気になって今は一緒に寝ている。

ポツチャマもパチリスも寝相が悪い。

ヒカリもアンズもグツスリ眠っていた。

P (ピカチュウ) 『寝れない・・・』

ピカチュウはパチツと目を覚ました。  
横でアンズが眠っている。

P (眠れないと暇・・・)

ベツトから飛び降りてポツチャマとパチリスを見た。

パチリス  
P A 『寝れないの?』

P 『まあ、ね。ポツチャマは?』

P A 『グツスリ』

パチリスはクスクス笑っていた。

P A 『ねえピカチュウ』

P 『んー?』

P A 『どうやってたらそんなに強くなれるの?』

P 『さあ? 僕も良くわかんないよ』

P A 『え?』

P 『だってさ』

ピカチュウは窓際の机の上に飛び乗った。

P 『僕だって最強なんかじゃないし、きっと最強なんて居ないと思うな』

P A 『……』

P 『それと、僕が強くなったのはきっとアンズのおかげ』

P A 『えっ!?!』

P 『アンズが居たから僕は自分がどれだけ弱いのかも知ったし、世界にどんなポケモンが居るのかも知った』

P A 『……私も……ヒカリと一緒になら強くなれるかな?』

P 『強くなりたい、って思ったらいっぱいバトル!! 後は信頼関係の問題だもん』

ピカチュウはニッコリ笑ってしっぽを振った。

PA 『信頼……』

P 『て、何エラソーに言ってるんだろーねーw』

PA 『フフフ……』

P 『わ、笑うな！！もう寝るぞ！！』

ピカチュウはアンスのベットに潜り込んだ。

PA 『お休み、ピカチュウ』

P 『お休みー』

パチリスは絶対強くなるぞー！と、闘志を燃やしていた。

〈次の日の朝〉

「さあて！明日がいよいよコンテスト本番！！がんばろーねポッチ  
ヤマ！パチリス！」

『ポッチヤマ！！』

『チパチ〜パ！！』

と、アンズも起きてきたようだ。

「おはよー・・・朝から元気ね」

「おばあちゃんみたいな事言わないでよ」

「じよーだん！ご飯食べたなら地下に行こ？」

「うん！」

2人は食堂へ向かった。

朝ごはんは2人共同じものを食べていた。

トーストに目玉焼きにベーコンにサラダ。

更にはヨーグルトも付いていた。

「で、溜め技使うの？」

「うん。何とか1日で出来るどこまで頑張ってみるわ」

「その意気！！」

アンズはパンにベーコンと目玉焼きを乗せて食べていた。

ヒカリはパンを食べ終わりサラダを食べていた。

「それにしてもコンテストかあゝ・・・緊張するなあ・・・」  
「リラックスリラックス。絶対成功するよ」  
「ありがとう」

ヒカリはポツチャマをチラリと見る。

ピカチュウと仲よくポケモンフーズを食べていた。

「この子達はのんきで」  
「いいよね」

2匹は顔をあげ、同時に首をかしげた。

「で、どうするのー？順番」  
「うん・・・パチリスを演技、ポツチャマをバトルにしようかな・  
て」  
「そっか・・・がんばってね」  
「うん！」

2人は食器を片付けてから地下の町へと向かった。

く練習 最終日く

「ポツチャマ！つつくをクチバシに集中させて！」

ポツチャマは集中し始めた。  
ググツと少し伸びては縮む。

『ッチャマ！』

集中力が切れてつつくは失敗した。

「もう一回！つつく！」

と、クチバシが伸びて戻って。

『チャマく……』

さらに集中を続けていると、だんだん長さが安定してきた。

「もうちょっと！」

ヒカリが声をかけると、途切れた集中力をまた高め始めた。  
と、ググツと伸びて、長さが安定した。

「今よ！岩につつく！」

『チャマー！！』

ドコーン！

岩はひびが入り砕けた。

『ツチャマー!!』

「やったねポツチャマー!」

ピョンピョンジャンプしていた。

「パチリスが出来るようになったらさらに持続時間を延ばす練習しよ」

『チャマー!』

ヒカリはパチリスを出す。

「パチリス、ひっさつまえば!」

『チパ!』

「そのまま集中して!」

『チパ〜・・・』

まえばに1点集中させる。

『チパ〜・・・』

パチリスは集中しているがなかなか上手くいかない。

PA(う〜ん・・・上手くいかない・・・)

パチリスはさらにジッと集中させた。

いつもほっぺに電気を溜めるように、前歯に力を溜めた。すると、グググッと数センチ伸びる。

「今！ひっさつまえば！」  
『チパー！！』』

見事に岩を真つ二つに割った。

「やったねパチリス！」

『チパ！』』

『ポツチャマ！』』

3人は（1人と2匹）大喜びしていた。

「次はキープね。一瞬じゃだめだもの」  
『ピカチュ』』

アンスは岩の上から見ていた。

「うん！よし！一緒に行くよ？」

2匹はグッと溜める。

「つつく！とひっさつまえば！！」

この特訓は夜まで続いた。

そして

次の日を迎えるのだった。

コンテストまであと1日？（後書き）

〜次回〜

コンテスト in the ロックタウン

お楽しみに〜

〜番外〜

A「おそーい！！！！」

ご、ごめん！！

A「銀魂のばっか書いてー！！BLEACHも書きなよ！！これも書きなよー！！」

他小説出しすぎー！！

。。。；

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4344h/>

---

ピッピカチュウ

2010年10月13日16時39分発行